2005（平成17）年12月10日　第20号

発行：（福）十字の園本部事務局
理事長　平井　章
住所：〒431-1304
静岡県浜松市細江町中川7220-11
tel 053-436-9535
fax 053-437-1352

社会福祉法人　十字の園

ぶどうの木

（ヨハネ福音書 15章）

平和実現のプロセス！

伊東市立養護老人ホーム
平和の杜　施設長　森　茂廣

誰もが望んでいるはずなのに、誰もが戦争を終結させ平和に生きることを望んでいるはずなのに、なぜ、世界中で、テロや紛争が絶えることがないのでしょうか？…伊東市立養護老人ホームの愛称を「平和の杜」としてから、改めて、平和について、考えることが多くなりました。「平和の杜」と名前をつけただけで、平和になるわけではありません。この小さな共同体の平和を達成するためにも、共同体の成長を目指すケアプランとケアが必要であることを痛感しています。まず、お一人お一人の悲しみ、恨み、憎しみの感情を受けとめることに始まり、癒し、ゆるし、和解、そして、相互理解を深めつつ、生きる希望、生きる喜びを創り、育てるプロセスが必要となるからです。

認知症ケアの新しい文化として、パーソンセンタードケアを研究提唱されたトム・キットウッド氏はたびたびマルチン・ブーバーの愛と平和の哲学＝「われとなんじ」を引用しておられ、認知症のある人に対して、人格を尊重し、「人」として向かい合うべきであると強調しておられます。私たちも、まず、お一人お一人の「心の平和」を大事にするケア、その人らしさを大切にするケアの実践に努めたいと思っています。

「聖隷の楽働時代」を通して「十字の園の楽働時代」を

理事長　平井　章

振り返ると、御殿場と伊豆高原で働いていた頃は、御殿場十字の園や伊豆高原十字の園だけを見ていました。聖隷福祉事業団から人と土地が与えられ、ドイツの教会やディアコニッセ母の家の多くの人たちからの献金で十字の園老人ホームができたことなど、何も知らないまま、そのこととは関係なく、日々働いていました。1985年に浜松へ転勤になりました。法人事務局や浜松十字の園で仕事をし、日曜日は教会の礼拝に出席する中で、聖隷を築いてきた先輩方のお話を聞く機会が増えました。聖隷の創立からの働きと十字の園の創立からの働きの延長線上に御殿場があり、伊豆高原があり、今の私の働きがあることを感じることができました。

今年度の中堅職員研修「次期リーダー育成研修」の第1ステップに、理念と精神の研修を行い、第2ステップにリーダーとしての実技研修の構成としたことはとても意義深いものと思っています。研修に参加した職員から、聖隷福祉事業団と十字の園の創立の精神と理念の講義を受け、聖隷歴史資料館と浜松ディアコニッセ母の家の復活礼拝堂を見学した中から、それぞれの施設での自分の働きの位置を知ることができたとの感想がありました。大きな感動を覚えた声もありました。私が浜松に転勤して感じた「思い」を共感できたような気がします。

松崎で開催されたキリスト教高齢者研修会の席で、講演された阿部志郎先生から「聖隷の楽働時代」という書き物をいただきました。今から30年前に、座談会の話をまとめたものです。楽しく働く時代、結核療養所であったベテルホーム時代は、給料は無く、鈴木マツ「夏は午前4時30分、冬は5時起床、夜は9～10時頃まで働き、休みは日曜日の午前中だけで年中働き通しでした。」と言いながらも、楽しく働くことができた時代というのです。文中に、聖隷の初期の時から関わった鈴木唯男先生の話された『私は正直いって、そういったことがなければ天国は信じられなかったですよ』の言葉が目に留まりました。唯男先生が「天国を信じることができた」「そのこと」とはどういうことだったのでしょうか。一文をお読みください。

聖隷の楽働時代

司会　ベテルホーム時代の看護というものはどういうものだったんでしょうか。

唯男　ベテルホームの中は、死に向かっている重症患者ばかりですから大変でした。私は聖隷の看護の基礎はベテルホーム時代にできたと思いますよ。今よく死の臨床っていいますが、昔の看護はその一言だと思うんです。そこでは、死ぬことに対して身を任せられるようになった時、はじめて生きられる人間になる。死ぬ体制ができた時病気が治るということです。

司会　それは身を捨てるということですか。

唯男　身を捨てるというんではなくて……患者の様子によって、この患者はいつ頃まで持つのかという目やすがつくでしょう。そうすると半年なら半年の間に死に対して、この患者が死に向って生きられるような人間にしてやらなくてはいけない。つまり立派に死ぬことのできる人間をつくることが、この時代の看護なんです。立派に死ねる人間をつくった時、そこから立派に生きられるという道が開かれる。

司会　そういうものはどのようにして身につけていったんですか。

唯男　それは患者と我々が共に生きていたからでしょうね。死に向っている患者に我々が教えることってないですよ。だから忍耐的な看護をしながら、精神的にはこちらが教えられているのでした。死をみつめることもできるし、死を乗り越えていく現実にも教えられるし……私は正直いって、そういったことがなければ天国は信じられなかったですよ。

時代が変わり、制度が変わり、高齢者福祉に対する知識や技術が確立されてきました。しかし、その原点はこういう働きにあると思います。

前文に、「聖隷はいま世代の交替期に入ろうとしている。聖隷の創設期の逞しい精神を受継ぎながら、新時代の聖隷を築かなければならない。」とありましたが、十字の園への言葉として受け止めたいと思います。

「いつまでも現役で」

社会福祉法人 十字の園　理事（技術コンサルタント）　古川　昭

33年間勤めていたスズキ株式会社を定年退職してから早いものでもう11年が過ぎ、私も72歳になりました。それまで自動車の設計ばかりでなく、電動車椅子などいろいろな設計の仕事を経験してきたことが幸いして、一緒に仕事をしようという人たちが何人か現れ、今は主に福祉機器の開発を手がけています。なかなか事業として成功するところまでいかないのが実情ですが、その中で最も大切なことは、本当に必要とされるものが何かを見極めることだ、ということに最近ようやく気付かされました。あたりまえの話ですが、使う立場の人、そして売る立場の人が評価するものでなければ、どんなに良いアイデアであっても買ってはいただけないということです。そこで今は、販売部門を持っている企業からの依頼にもとづいて、機能、価格、安全性及び開発費用など、相手の要求にできるだけ合わせ、しかも他ではできない新しいアイデアを盛り込んで開発する、という仕事だけに専念することにしました。やってみるとこの方が、独りよがりの設計よりもはるかに難しいことに気が付きました。相手企業のスタッフの人たちと、それこそ夜を徹してお互いに納得のいくまで討論し合って、細かいところまで取り決めていき、これを設計途中で何度も繰り返します。

その代わり相手に満足していただけさえすれば、必ず売れるという保証があるという安心感と喜びがあります。このことはきっと、どの世界にも通じる真理ではないかと考えています。相手の本当に必要とするものを見極めて提供する、そのためにはあらゆる知恵と努力を惜しまない、その結果本当の喜びが得られる。言い換えればこれが「愛」ということではないでしょうか。

日本キリスト教社会事業同盟事務局の交代にあたって

日本キリスト教社会事業同盟　前総幹事　小森　宏

日本キリスト教社会事業同盟は、発足以来48年間東京に事務所を置き活動を続けてきましたが、事務所経費が財政を圧迫し基金取崩しによる運営を強いられていました。この事態を打開するため会費の値上げが検討されましたが、当時の活動状況では会員賛同を得るのは困難な状況でした。

その解決として事務所経費の削減と専任職員の廃止による健全化対策が取り上げられ、神戸に事務所が移ることになりました。神戸の事務局には事業の活性化と将来に会費改正の同意が得られる活動が求められました。そこで従来実施していた年1回の総会研修会に加えて種々の研修会、大韓イエス教長老会との交流、「紀要（ホーリスティック社会福祉研究）」誌発行など事業の活性化に取り組みました。その結果基金の取崩は大幅に減少しましたが逆に事業費が増加し、なお基金の一部流用による運営を続けざるを得ない8年間でした。

2003年同盟は「将来構想検討プロジェクト」を設置し、同盟の将来のあり方について検討を進め、2005年1月最終報告を作成しました。前常務委員会はこの構想を是非実現し更なる発展と懸案であった会費の改正を行いたいとの思いから、第61回総会で理事長・総幹事の若返りを図るとともに会費の値上げに踏み切りました。専任でない事務局体制のため、会員の意に充分応えることのできない神戸事務局であったことを申し訳なく思います。

新体制は理事長、総幹事とも年令も若くかつ熱心な信仰者であり職場も近く連絡もとりやすく、これ以上最適の体制はないと信じています。事務局の方々も有能でIT時代にふさわしい新しい発想をもって、効率的な運営によって会員の期待に応えられることと思います。同盟として長年の課題であった日本基督教団との協力関係も道筋が整い、協力し合える時が来たと考えています。今後益々連携を強め、宜べ伝える業としての「伝道」とともに社会事業の仕える業としての「奉仕」の実践の協働により、神に嘉みせられる活動が続けられますよう祈っています。

2005年十字の園大会報告

「理念の継承」を目的にスタートした十字の園大会も、今年で10年目を迎えました。

今回は、伊豆高原十字の園から数百メートル離れた「ライオン研修センター」を会場に、法人内各施設より70余名が参加して、福祉の原点やユニットケアなどについて深い学びと熱い討議が展開され、十字の園の精神をあらためて学び感じ取ることのできた実り多い2日間でした。

大会は、伊東教会内田知牧師による「隣人を愛しなさい」との開会礼拝で始まり、吉田好里牧師（元伊東教会牧師）による基調講演。各施設での取組みや研究内容の発表。高橋誠一氏（東北福祉大学教授）による認知症のパーソンセンタードケアについての課題講演。伊豆八幡野教会久保島泰牧師による「恵みを大胆に用いよ」との閉会礼拝に至るまで、主題である「十字の園における福祉の創造 ～既に据えられている土台の上に～」に基いた内容でした。

施設発表報告

今回の施設発表は、「『共に生きる』（私たちの挑戦、その動機と目標）」を課題テーマとして、7題が発表されました。

浜松十字の園からは「浜松十字の園における『認知症に対するケア』について」と題し、認知症高齢者の理解と理念に基づく認知症ケアについての研究発表。御殿場十字の園からは「施設における口腔ケアの実践報告」と題し、食べられる・しゃべれる口作りを目指しての研究発表。伊豆高原十字の園からは「共に生きる」と題し、自立支援（ADLに合った生活環境の提供に向けて）の実践報告。松崎十字の園からは「ユニット内における介護アンバランスとその効能」と題し、ユニット全体を考えた時、職員は利用者への時間をどのように分配するかについての取り組み報告。アドナイ館からは「健康で楽しく現状の生活を維持できる為に」と題し、機能訓練と介護予防及びその効果報告。伊東市立養護老人ホーム平和の杜からは「アルコール依存症のある利用者さんと共に生きる」と題し、グットネスケアを基本とした利用者への尊厳を支える実践報告。オリブからは「認知障害者の隠されたニードと向き合って」と題し、知的障害者の隠されたニードの発見と援助についての発表が行われました。

それぞれの施設からの発表を通して、『新たに創造していく福祉』への道筋を見い出す参考として、とても意義のある発表でした。

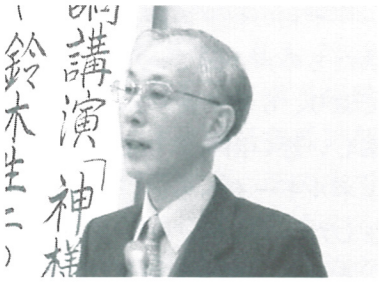
ヴィヴァ！それぞれの研究発表にケアの成長を感じました！

今回の十字の園大会は、各施設からの発表があったせいでしょうか、先回に増して、参加者の主体性、熱意が感じられました。また発表を通して、施設間の相互交流、相互理解、連帯を深める機会となったように思います。パワーポイントをフルに活用した研究発表は、とても分かりやすく、それぞれの施設の特色や、利用者と真剣に向き合っている姿がよく理解できました。

ユニットケアについても、ハードや仕組みを工夫する段階から、明らかに個々の入居者のその人らしさを支援するという次のステップに重点が移っていることに、ケアの成長を感じました。入居者の皆さんの生活場面を映し出しながら、「入居者の思い、心情」を、スタッフが一人称で語った浜松十字の園の発表は象徴的でした。『新しいケア文化』が浸透し、広がりつつあることを感じました。

基調講演　神様に利用された人 ～鈴木生二の信仰と理念～

講師：吉田好里氏（新松戸幸谷教会牧師）



今年度は伊豆高原で開催されたということもあり、伊豆高原十字の園の開設当時、日本基督教団伊東教会の牧師であり、その定礎式や献堂式の司式を務めていただいた吉田好里牧師に講師をお願いしました。十字の園初代理事長であり、また伊豆高原十字の園の初代施設長でもある鈴木生二氏のその人となり、また生き方について基調講演を頂きました。

鈴木生二氏は口数が少なく寡黙な方だが、その内に秘めた強い思いが感じられるそのような方だったそうです。飛行機に「帰還不可能地点」（燃料の関係である地点を過ぎると、目的地を目指して飛んでいくしかない地点）があるように、鈴木生二氏の人生にも幾度となくそのような地点があったようです。十字の園設立、御殿場十字の園開設、伊豆高原十字の園開設。そのたびに、聖書のみ言葉に導かれ、「先行きを知らずに」歩んでおられたそうです。それは、鈴木生二氏の信仰によるもので、「徹底的に神様に愛されている者であると自覚する者のみが、真に神様に利用され得ることを心でよしとするものであろう」という神様に愛されて生き、そこで神様に利用される、つまり成すべきことを成した方だったのです。

伊豆高原十字の園設立時に鈴木生二氏は、「過去20年間積み重ねてきたことを、そのままここで継承したいとは思いません。皆さん新しい人と一緒に、新しい心で取組みたいのです。わたしも一からやり直すつもりで、皆さんと一緒にご老人の処遇を考え、ここで完成品をつくりたいのです。」と語ったそうです。残念ながら氏は神のもとへ召され、完成品を創ることはできませんでしたが、完成品を創るのは今ある私たちの使命だと教えられました。

こうして先人たちの精神を受け継ぎ、理念を理解し、また、日本で初めて作られた特別養護老人ホームの職員として胸を張って歩むよう、その道を示されました。

課題講演　新しいケアの文化創造へ ～その人らしい生活を目指し～

講師：高橋誠一氏（東北福祉大学総合福祉学部教授）

大会2日目は、東北福祉大学の高橋誠一教授よりパーソンセンタードケアについてお話を伺いました。パーソンセンタードケアとは、「その人らしさを大切にしたケア」で、イギリスのトム・キッドウッドが提唱しました。認知症の方々の詳細な観察から、認知症の方にとって好ましい状態と、好ましくない状態を明確にし、「古い文化」と「新しい文化」の対比の中から、新たな認知症介護の指針を示したものです。

"認知症"の人　から　認知症の"人"へ

認知症の中核症状やそれが原因で起こる様々なコミュニケーションのとりにくい状態などをみるのではなく、その人自身を見てケアするという「問題ではない」見方が介護者にどれだけできるのかということが重要になります。

高齢者や障害者などという言葉に人々をくくる必要は全くなく、区分けした時点で古い文化ではないか？今、ユニットケア、バリデーションなどいろんな手法、概念がとりざたされてはいるが、最初から言わんとしていることは同じで、一人ひとりに合ったケアをするということを学び、今後の介護に大いに役立つ大きなヒントを学びました。

子供たちに元気をもらいました！

伊東市立養護老人ホーム　古川　善也

「平和の杜」の隣には、大池小学校があり、普段から運動場で遊ぶ元気な子供たちの声が聞こえてきます。大池小の児童たちとは定期的な交流の場を設けており、6月にまず、ホームで用意したプログラムに沿ってお年寄りと共に、楽しい想い出を作りました。9月には、大池小の運動会に招かれ、子供たちのエネルギーをもらい、また、昔の懐かしい運動会の情景を思い出す機会となりました。

そして、今回（10月25日）は、4年生15人が自分たちでプログラムを準備して、遊びに来てくれました。ほほえましい挨拶に始まり、子供たちが作ったいろいろなゲームで、お年寄りの皆さんもいっしょに童心に返り、楽しく遊びました。そのあとで、手話まじりの歌や子供らしいはつらつとしたダンスを披露してもらいました。また、肩もみや握手などで直接ふれあう場面もあり、お年寄りは目を細めて喜んでいました。最後にお年寄りの一人がこつこつと作り貯めておいた手づくりの小物を子供たち全員にプレゼントすると、子供たちからも大歓声が上がり、温かい雰囲気の中、交流会を閉じることができ、とても心地よいひとときとなりました。

介護タクシー「夕光（ゆうかげ）号」発進！！

御殿場十字の園　竹上志奈子

御殿場十字の園では11月より介護タクシー事業が開始されました。社会福祉法人としては県内初の試みということで、分からないことが数多くありましたが、多くの方の協力をいただき、ようやく開業にこぎつけました。

10月下旬に専用車両が届いた時、その新品のピカピカボディに介護タクシーの未来が反映されているようで頼もしく感じました。車種はトヨタのファンカーゴ、施設長が命名した愛称は『夕光（ゆうかげ）号』。これは十字の園の理念である「夕暮れになっても光がある」から引用されています。

介護タクシーの利用対象者は通常のタクシーとは異なり、介護保険の「要支援」「要介護」の方と「身体障害者」の方に限定されるため、開業前から問い合わせが多く、利用される方の関心の高さがうかがえました。

現在は手続きをされたお客様を乗せて日々、安全に、軽快に、街中を走行している『夕光号』であります。

クリスマスツリー

浜松十字の園　鈴木　郁三

この時期ともなれば、街ではジングルベルやきよしこの夜のメロデーが流れ、たくさんの電飾をまとった華やかなクリスマスツリーを数多く見かけます。

十字の園は開園当初よりドイツ母の家の姉妹より伝えられたドイツ式のクリスマスツリーを飾ります。3メートル程の高さのモミの木の枝々に真っ赤なリンゴがぶら下がり、麦やパラフイン紙で切り紙された星や天使の足跡と呼ばれる細く美しい銀が枝にそっとかけてあり、ローソクに灯された柔らかな光がキラキラと揺れとても幻想的で美しいツリーです。8ページの写真が浜松のツリーです。

デイサービス・ミニ運動会。今年も熱かった！

伊豆高原十字の園　勝野ますみ

近所の幼稚園や小学校からにぎやかな音楽が風にのってやってくると、運動会の気分が盛り上がってきます。デイサービスのミニ運動会は開所以来の恒例行事で6回目を迎えました。

今年は、前の週から利用者の皆様と万国旗を手作りし、玉入れの予行演習も行い、準備万端。とは言え、最高齢は96歳のデイサービス。まさか自分が主役になるとは、ほとんどの方が思ってもいません。ところがこれが、いざ開会となると…。

選手宣誓から始まり、綱引き・順送球・パン喰い競争と、モチロンどの競技も座ってできるようルールを考えてあるのですが、昔のおてんば娘、やんちゃ坊主姿が想像できてしまうハッスルぶり！クライマックスの玉入れは、膝に山ほど玉を抱えて、終わりの合図が鳴ってもまだ飛び交う玉・タマ・たま…。おいくつになられてもやはり勝負ごとには勝ちたいのが、若さと元気の秘訣なのでしょうか？

青い空、青い海が最高のご馳走！

アドナイ館　鈴木　晶子

11月初旬、デイサービスご一行様の「秋の食事会」は、海辺のレストランで小洒落たランチ。

野菜の赤く煮たものの上に魚の塩焼きが乗っかって出てきたのは、鱸(すずき)のポアレというお料理でした。

（共食いしちゃった？）ご飯がおいしいね～漬け物が欲しかった…おっと、フレンチでしたね。

ドライブは浜名バイパスから海沿いに弁天島へ。浜名湖大橋から浜名湖ガーデンパーク…と遠州灘と浜名湖を満喫するコース。

花博に行けなくても、モネの庭だけはバッチリです。

3日間とも雲一つない晴天に恵まれたこと。それが一番のご馳走でした。

小さな街の大きなイベント

松崎十字の園　山本　隆弘

日本キリスト教社会事業同盟高齢者福祉研修会が10月13～14日に松崎で開催されました。全国規模の研修会ですが、まさか鉄道も走っていない小さな街“松崎”で開催されるとは驚きです。私が参加した時は駅前の立派なホテルが会場でしたが、今回のメイン会場は町役場の会議室と松崎教会の礼拝堂。宿泊は長い歴史のある大沢温泉ホテルと、のどか～な雰囲気で行われました。でも現地スタッフは大忙し。施設長は片道2時間かけて三島までの送迎と総合司会を担当し、他の2名も準備・受付・録画・片付け…。やることはたくさんあっても全てに手が回らないので、十字の園各施設からの参加者へ当日いろいろと頼んだり、教会員の皆様にも礼拝堂での細々とした準備をしていただいたりと裏方は結構大変でした。でも、この手作り感というか一体感は心地よいものでした。町の職員や教会員の方が研修会に接してくださったことで、今まで以上に深い交わりができそうです。松崎の地に蒔かれた種をいろいろな方々と一緒に育てていきたいと思います。

（3頁に関連記事が掲載されています。）

未来を担う『宝物』

御殿場十字の園　渡邉　直美

御殿場十字の園では赤ちゃんの声がよく聞こえる日があります。育児休業中の職員が我が子を連れて来てくれるのです。只今、育児休業中６人、復帰３人、予備軍２人…。中には若いお父さん職員が、休日に子守を兼ねて訪問することもあります。

この２年間にナント約20人もの赤ちゃんが誕生する、子宝優良事業所の高齢者福祉施設なのです。利用者の方々も親しい職員の赤ちゃんは孫も同じ、といった具合でたいへん喜んで下さいます。人見知りで泣き出す声さえ微笑ましい光景ですね。

今、日本では少子化による次世代への問題が懸念されています。働く女性が安心して子供を産み育てられるようにと、育児休業法も改訂されました。しかし、そうであっても介護の現場では難しい問題が多くあります。入浴介助や夜勤体制…。母体に負担をかけない様にと本人はもちろん、周りの職員もフォローするのですがどうしても無理をしてしまいます。でも、そんな時だからこそ皆で知恵を出し合って仕事の見直しや改善、そして何よりも互いを思いやる優しさで補ってもらいたいのです。

私は残念ながら直接介護の仕事ではありません。現場での苦労も分かりません。でもわずかでも、職員が働きやすい環境のお手伝いができたなら…と考えます。未来を担う宝物、「十字の園」という大きな家族で、大切に育んでいきましょう。

あとがき　十字の園クリスマスツリー

十字の園で飾られているクリスマスツリーについて、ディアコニッセ母の家の山浦ミツ姉妹にお話を伺いました。（山浦ミツ姉妹は、十字の園設立当初の理事です。）

十字の園が開園された年のクリスマス。ドイツから聖隷保養園（現在の聖隷福祉事業団）へ来られた５人のディアコニッセ（奉仕女）がドイツ式のクリスマスツリーを装飾して下さいました。大きなモミの木にリンゴ（本物です）がさげられ、紙で作った雪の結晶や金平糖のような星がつらなり、天使が降りてくるようにろうそくと“天使のあしあと”と呼ばれる銀の糸が飾られ、そのろうそくに照らし出される光り輝くベツレヘムの星。この独特のスタイルは、毎年、職員や入居者の手で飾られながら、現在に引き継がれています。

十字の園創立30周年の記念誌にはこのように記されています。“その静かさと深さに思わず息をのんだあの三方原のクリスマスツリー。緑の葉とろうそくだけで飾ったテーブルをセットして聖夜礼拝の場を作ってくれた。今、三方原で行なわれるクリスマス前夜の「聖夜」の起源は此処にある。以来三方原に生活した人びとには、心の故郷としてこれが生きつづけている。”と…。

十字の園の各施設のクリスマスツリーもこの伝統を引き継いでいます。是非、ご覧下さい。

皆様の暖かい御支援をお待ちしております!!

〒431-1304 静岡県浜松市細江町中川 7220-11

社会福祉法人　十字の園

理事長　平　井　　章

銀行振替　静岡銀行細江支店 普通 0015345